



いつでもどこでもミャンマーの人々は柔らかない笑顔を向けてくれた

止まった時間が動き出した

数年前には、まさかこの国を訪れるとは想像していなかった。軍事政権下で人々は抑圧され、経済制裁のために貧しい生活を送っている。そんなイメージを抱いたまま、ミャンマー最大の都市ヤンゴンに降り立った。

乾期が終わりがけた4月末、日中の気温は約40度。あまりの日差しの強さに、少し動くだけで汗だくになる。

市街地に入ると、イギリス統治時代の古めかしい建物があちこちに見える。露店に並ぶ色とりどりの野菜、魚、肉。道路脇では仕立て屋の青年がミンシンを踏み、マーケットでは若い女性が伝統衣装のロンジーを売っている。

街中を歩いている、ふとアパーを見上げると、窓からおじいさ

んが手を振ってくれた。目が合うと、誰もが柔らかない笑顔を向けてくれる。国際社会から孤立しても、彼らはしなやかに、たくましく、その時代を生き抜いてきた。ずつと変わらない、人々の穏やかな生活がそこにあった。

しかし今、この国に大きな変化の波が押し寄せている。2011年に新政権が発足し、新しい国づくりが進められているからだ。

すべての人の声を取り入れた開発のために

ヤンゴンから一路 南東へと車を走らせる。目指すのはカレン州の州都バアンだ。

カレン州は、この国を構成する約130の少数民族の一つ、カレン族の人々が暮らす地域。独自の文化や言語を禁止されるなど弾圧を受け、政府と武装勢力のカレン民族同盟（KNU）が60年以上も対立してきた。その状況が今、変わりつつある。

走り続けていると、地平線が見えるほど一面の平野だった景色が次第に変わり、遠くに山々が見えてきた。約5時間かけてたどり着いたバアンで、株式会社レックス・インターナショナルの橋本司さんと合流した。アフガニスタンの首都カブールの都市開発をはじめ、長年、国際協力に携わってきた専門家だ。



どのような開発が必要か、バインチョンの役場で行政官から情報を集める橋本さん(左手前から3人目)

「2012年、少数民族の武装勢力の中でも最大規模のKNUが政府と停戦に合意したことは、国が一つにまとまる大きな一歩」と橋本さん。カレン族の人々は、政府とKNUとの戦闘に巻き込まれ、村が焼き払われたり強制労働をさせられたりと、残酷な経験を

してきた。タイに逃れ、国境近くに9カ所ある難民キャンプで暮らす人は約14万人もいる。生まれ育った土地を離れ、国内の別の地域に避難している人は40万人ともいわれるが、正確には分かっていない。

「この地域はこれまで政府の統



誰もが安心して暮らせる祖国に

成長の裏側にある葛藤一。
長年にわたり、政府と少数民族の武装勢力が対立してきたミャンマーに、
今、平和への光が差し始めた。
その現状を確かめるため、変化の渦中にある現地へと飛んだ。



タイの難民キャンプからミャンマーに帰ってきた親子。家には家財道具がほとんどない



バインチョンで出会った難民キャンプから帰ってきた人々。ここ1年で増加しているが、正確な人数は把握されていない

勢力は、1991年に政府と停戦に合意。しかし、この地域にはほかに複数の民族が暮らしている。その一つ、シャン族の武装勢力と政府との対立が続いているため、道路や給水などのインフラも学校の建設も進まず、山がちという地理的条件も相まって、他州と比べると開発が遅れている。

現地に駐在するTPAの柴田京子さんは、「最初にバオ族のリーダーから、モノではなく技術を教えてほしい」と言われました。貧しくても誇りを持ち、自分たちの足で歩もうとしていると感じました」と振り返る。

目を付けた。化学肥料や農薬を正しく使えずに生産性が落ちてしまいい、また、せっかくなった作物も仲買人に安く買いたたかれてしまっていたからだ。

まずは研修を通じて、有機肥料や麦や大豆、コマなどを栽培する方法を指導。有機栽培」という付加価値を付け、高い価格で販売するためだ。さらに、共同組合を組織し、作物の共同出荷・販売を進めている。

「現地の人々の努力のかけあつて、収穫量は徐々に増え、アンテナショップや宅配など、独自の販売ルートも広がっています。このモデルをミャンマー全国に広げ、他の少数民族、そしてすべての農家の生計向上につなげたい」。そう柴田さんは展望を語る。

帰る家があり、仕事を持ち、家族と共に安心して暮らせる生活。「ここに帰ってこられて幸せ」。民族にかかわらず、すべての人がそう思えるように。この国の輝く未来のため、一歩一歩、人々を前を向いて進んでいる。



共同組合の仕組みを説明するTPAの柴田さん(左奥)。「共同で出荷量を管理・販売する仕組みを理解してくれる人が増えてうれしい」



シャン州でTPAが支援するバオ族の人々。研修で有機肥料のつくり方を学ぶ



夫と7人の子がいるノーボーエイさん。「生活は大変だけど、家族や親せきに会えたから帰ってきてよかった」

タイ側に位置するウムピエンマイ難民キャンプ。キャンプで生まれた世代も多い



「水はどうやって確保していますか。」
「井戸でまかなっているところが多いですね」
「作物の出来はどうですか？」
「コマは自分たちの消費分は生

産できています。トウモロコシやコマも栽培していますが、収入源になるほどの量ではありません」
このように、人々の声、を聞いていく。「レンガを一つ一つ集め、積んで、家を建てていくようなもの。全体像を常に見据えて、開発のロードマップを描いていきます。30年にわたり、さまざまな開発途上国で開発計画づくりを支援してきた橋本さんの言葉は力強い。」
「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

れた。

「難民キャンプには電気も水もインターネットもあつたけど、外に出られなかった。ここは不便なこと多いけど、自由がある。帰ってきてよかった」
そう言って彼女たちは笑顔を見せる。

家に入らせてもらおうと、家具もなく、がらんとしていた。「タイ

治が及ばず、道路をはじめインフラの整備が遅れている。停戦合意により少しずつ治安が安定してきた今、どう開発していくか、難民や国内避難民が帰ってくることも踏まえた計画が必要だ」と橋本さんは話す。彼をリーダーに約20人の専門家チームがバアンに拠点を置き、カレン州と隣接のモン州を合わせた南東部一帯の開発に向けて調査を進めている。政府側、そして少数民族側の人々の、生の声を聞くためだ。

この日はバアンから車で3時間ほどのバインチョンへ。タイ国境側にあるメラ難民キャンプから近く、多くの難民が再定住することが見込まれている場所だ。

砂ぼこりを上げ、舗装されていない道を進む。車は上下左右に揺れ、捕まっていないと頭をぶつけそうだ。「これでもこの3カ月でだいぶ整備されたんですよ」と橋本さんは言う。

バインチョンの役場に着くと、農業、教育、保健医療、給水、警察など、それぞれの分野を担当する行政官たちが20人ほど集まっていた。



行政官から聞き取り調査をする金田さん(右端)。「人々とじかに接するまさに“現場”での仕事なので大変ですが、とてもやりがいがあります」

「逃げたときは着の身着のままだったから、何も持っていないのよ」。ここに住むノーボーエイさんから、そんな答えが返ってきた。「夫は農家の手伝いをしているけど、定職が見つからなくて。自分の土地を持って農業ができればいいのだけど。将来が不安です」。

そう、故郷に帰ってきて、以前とまったく同じ生活ができるわけではない。彼らが生活を立て直せるよう、インフラはもちろん、仕事も必要だ。この地域で盛んなゴム栽培を地産産業に育てるというアイデアもある。どう実現させていくか、すべてはこれからだ。

有機農業で人々の生活を変える

所変わって、ヤンゴンから北東へ車で約10時間。JICA草の根技術協力事業を通じて、シャン州で少数民族支援に取り組みむ日本のNGOがある。佐賀県を拠点に活動するNPO法人地球市民の会(TPA)だ。

同州に拠点を持つバオ族の武装